

津波で破壊された永沼家の石蔵



膨大な永沼家文書は『北上町史』の編さんに活用されただけでなく、『近世南三陸の海村社会と海商』(清文堂出版、2010年刊)という研究書にも結実しました。江戸時代の海的生活文化と政治経済を多面的に描き出しています。さまざまなかたちで書き残した古文書は、そこから過去を鮮明に浮かび上がらせることができる貴重な文化財なのです。

その後、未調査の古文書がありましたとの連絡を受けて永沼家を訪問したのは、2010年12月18日でした。それから3カ月後の3月11日、大津波が沿岸一帯を襲ったの

身。東北大学名誉教授。昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。3代目のサン・ファン館館長に就任した。



(今回は10月16日)

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長

ひらかわ あらた 平川 新

未来への航路

名振浜の永沼家

石巻市と合併前の北上町で町史の編さんが始まったのは、1999年のことでした。編さん委員長は東北大学の渡辺信夫先生。先生が2001年に物故されたので、私は翌年、特別編さん委員を委嘱されました。

北上市の編さんで大きな役割をはたしたのは、追波川を挟んだ対岸にある雄勝町名振浜の永沼家文書でした。同家は戦国時代以来続く旧家で、網元として漁業にあたるほか、千石船主として海産物を仙台や江戸に販売していました。大肝入などの村役人も務めていましたので、桃生郡浜方地域の経済と行政の中核を担う存在でした。町史編さん当時

は別の自治体でしたが、北上町の歴史を明らかにするために、永沼家文書の調査はどうしても必要だったので。同家には1万点を超える古文書が残されていました。データベースとして後世に残すために、全点をデジタルカメラで撮影しました。陣頭指揮をとったのは、町史編さん委員で東北学院大学教授の齋藤善之さん。機材の調達やデータベースシステムの構築に力を発揮してくれたのは、町

きで、歴史資料のデジタル保存に国内では最も早く取り組んだチームです。

私たちが名振浜を再び訪ねたのは4月4日。全戸が流失してしまいましたが、永沼家の母屋はもちろん、古文書を収めていた石蔵も跡が残っていません。津波は永沼家の石蔵を打ち破って古文書を流し去ったのです。幸いにして写真記録が残ることができました。そのため今後も、この記録をもとに歴史研究をすることはできます。しかし、生の古文書こそ文化財として大事にしなければなりません。地域の宝である古文書を、どうやって守っていくか。この地域でも直面する課題なのです。

③北上町史の編さん

ムだったのです。以後、ここで開発された保存システムが全国の歴史研究者に普及していくことになりました。

震災と古文書

膨大な永沼家文書は『北上町史』の編さんに活用されただけでなく、『近世南三陸の海村社会と海商』(清文堂出版、2010年刊)という研究書にも結実しました。江戸時代の海的生活文化と政治経済を多面的に描き出しています。さまざまなかたちで書き残した古文書は、そこから過去を鮮明に浮かび上がらせることができる貴重な文化財なのです。

避難所で永沼夫妻にお会いすることができるときは、本当にほっとしました。そのとき永沼さんは、こうおっしゃったのです。わが家の古文書はすべて流されましたが、みなさんが写真を撮ってくれていたおかげでデータ

東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26-31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。



古文書が保管されていた永沼家の石蔵